

高森一栄子

Kazueko Takamori

永子
大きく
振りかぶれ



永子

工業学院図書館
藏书章

りかぶれ

Kazueko Takamori

高森一栄子

講談社

高森一栄子(たかもりかずえこ)

1943年東京に生まれる。文化学院美術科卒。
大使館参事館秘書などを経て作家活動に入る。
1985年「土踏まずの日記」で第8回エンタテインメント大賞受賞。著書「笑い水の日記」ほか多数。

永子、大きく振りかぶれ

一九九〇年十一月十二日 第一刷発行

著者——高森一栄子

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二—二二

郵便番号——一一二

電話——東京(〇三)九四五—一一一(大代表)

印刷所——株式会社廣済堂

製本所——黒柳製本株式会社

定価——一四〇〇円(本体一三五九円)



落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問合せは、文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

© Kazuko Takamori 1990 Printed in Japan

永子、大きく振りかぶれ

装
幀
辰
巳
四
郎

まえがき

女性はいかに生きてゆくべきか？

どの時代でもこの疑問はつねに問われ続けてきた。男性に従って、女性らしさを忘れずに、ひっそり暮らして行くのもひとつ。キャリアウーマンとして男性と等しく社会人として生きてゆくのもひとつ。どの道もそれなりに価値がある。

現代は男女双方が生き方を問い直されている。独身者の増加。男性の結婚難。（男女双方の結婚難とも言える）離婚率の増加。寿命の延長にともなう不安定な老後。さまざまな問題のなかで女性には柔軟性のある、多様な生き方を要求されている。

この物語はひとりの女性が父の愛の特訓により、全日本女子剣道選手権大会三連覇を成就し、さまざまな困難を経て強く明るく生きて行く物語である。

女性の生き方の見本としては特殊なケースに入るかもしれないが、いかなる女性の人生もこの見本のなかの要素を持っている。「父」との出会い、母の教え、成長する過程の葛藤、配偶者と

の出会い、結婚、愛するものの死、おおむねだれにも訪れることだ。

それぞれの人生に優劣はない。どの人生もプラスマイナスで辻褄があつた人生となるはずだ。結婚になるべく好条件を求める女性が多いが、どの人生も同じだけの分量の悲しみ、苦しみ、喜びがあることを知るべきだと思う。

結婚がお互いを支えあうものであるなら、女性は男性より、より多く鍛えていなければならないと判断できる。強い男性を後ろから支えて行く必要があるからだ。

(一)

手入れのよく行き届いた庭園に、明るい陽射しが降り注いでいる。

池の周りの子供たちは、腰に棒を差して剣士きどりで遊んでいる。

永子が向かってきた男の子を、腰の棒切れを抜きながら素早い勢いで、払った。

「ヤーツ」

「やられた……」

肩を切られたという仕草をして、後ろに引いて行くと、再び別の男の子が迫って来る。

男の子に混じって、活発に動き回っている永子を眺めていた桑原透は丁度きていた中学時代の親友に話し掛けた。

「永子に、剣道は習わせようと思ふとたい、以前に話しておったろが、どきゃん思うね？」

「永子ちゃんに剣道……を？　女おなごんこの子に剣道さすつとや？」

友人は怪訝けげんそうな顔をした。

「そうたい、女おなごんこの子に剣道たい。これからの日本はおなごば強うせなならん」

「なるほどね……」

友人は頷いた。

桑原邸の日本庭園の池に赤や白の鮮やかな鯉が水面上がってくる。鯉が口をパクパクと開閉させ、二人の投げるフにくらいつく。

「永子ちゃんは活発だけん。剣道は向いているかもしれん」

友人は、大きく頷いた。桑原透は庭に飛び跳ねている永子を眺めて目を細めた。はつきりした目鼻立ちで、体格もしっかりした永子は男の子と互角に遊んでいる。武道をさせるには適した意志の堅さがうかがえる。

子供たちは、チャンバラごっこに飽きたのか、今度は犬を引っ張って、歓声をあげながら庭の奥へ行く。二人は眺めながら、微笑した。

「そぎゃんいえ、男の子おとこん生まれたら、剣道ばさせるといいよったな」

「おるがところは女の子おんなこばかりだけん。三人目も女の子おんなこでもう八年もたつとる。もう生れることもなからう思つて、諦めた」

彼の気持ちをよく理解できる友人は、黙って頷いた。

桑原透は、地域の児童教育について積極的な意見を持つようになっていた。

中学時代に剣道を修行したことのある桑原透は、解禁されて間もない剣道を地域の児童にもさせるべく小学校に交渉にも出掛けた。

子供は小さいうちから鍛えなければならぬ。なるべく多くの子供に剣道を練習させるには女の子にもさせなければならぬ。手始めに自分の娘、永子に始めさせよう。そう考えていた。

「それなら、おるがえん（おれのうちの）息子と一緒に始めさせればよか、永子ちゃんはおうちのぼうずとおない年だもんね」

友人は人の好い微笑を浮かべた。

「トールさんは三人目が生まれたとき、『そぎゃんに男の子に恵まれんのはおれに原因があるのだらうか？』ってばやきなはったもんね」

「ああ、そぎゃんこつあったたい。あんどきは『祝いやけ酒』といって飲みまくったもんナ」

「おどみやどぎゃんして慰めてよかとか、ほんに困ったたい」

「……でも今はもうそぎゃんこつ言っても始まらん。もうあきらめたけん。ともかく永子に剣道ばはじめさせる」

「しかし、永子ちゃんに習わすと、奥さんの反対すつとじゃなかつや」

「おるがえん（おれのうちの）こつは構わん、おどんが習わすとだけん」

友人は柔和に顔を綻ほころばせた。小さい頃からの友人同士、お互いの家のことはよく分かる。彼は桑原透が無類の亭主関白であるのを、知っていた。

「ま、そぎゃんつもりならよかたい」

桑原透の周囲では子供に関する質問はタブーになっていた。

「桑原、ぬしがや子供は何人だ？」

「三人だ」

「男の子か？」

「いや、みな女の子だ」

すると、相手が急に気の毒そうにする。

「男の子一人も作れんとかね」

「体がどこおかしかつじやなかつか？」

とまで言われる始末。こうまでからかわれると、桑原透はムツとする。

ある日他の友人にまた質問を受けた。

「にしがえ（君の家）は子供は、男の子か女の子か？」

堪忍袋の緒が切れたのか、彼は不機嫌そうに即座に言い放った。

「メス三頭！」

その話は妻起の耳にもはいつた。起は気が気ではない。

——男の子、男の子

と念じる余り、妊娠したと分かったときには、喜ぶと言うより、複雑な心境になる。今度も女の子だったら、皆にどんな顔されるか、わかったものではない。

八人姉妹の末娘、つまり八女に生まれた起が三人の娘を生んだので、夫は、「八女が三女をもったけんな」と時々からかう。

桑原透が永子に剣道を習わせようと思いつた動機には、戦後の混乱した教育体制もあった。敗戦から立ち直りつつある人々は自分達が苦労した分、子供には伸び伸び自由に育てようという放任主義も出ていた。甘やかすだけ甘やかす親が多くなっていた。

父兄会で「ある教師がうちの子供を殴った」と述べ「暴力は否定したい……」と主張した母親がいた。

席上はガヤガヤと私語で渦巻いた。

聞いていた桑原透はすっと立ち上がって言った。

「おるがえん娘が、悪かことしたら、叩いて下さい、訳を話して叩いて下さい。そぎゃんこつで

先生に文句は言いません」

大きな声でそう言い放った彼を一同、半ば茫然と見守った。

彼は戦後の父親像の崩壊を見聞きするたびに、「親がなつとらん！」と嘆いた。

もし、子供が悪いことをしても誰も注意をしなかったとしたら、大人になって、一体だれが直してくれるのだろうか。暴力は悪いが、言葉で言うこと聞かないのなら、体罰もやむをえないではないか。それを恨んで振じくれた子供に育つと言うのなら、殴らなかつたために振じかれて大人になるほうが、もっと悪い。

獣医である桑原透は「子供の教育は犬の調教と同じだ」が口癖。子供達が池の周囲で、飛び跳ねているのを見ていて、叱るべきときは徹底して叱る。その代わり可愛いがるときは蜜でも舐めるかのように、徹底的に可愛がり、中間がない。

彼は九州という土地柄の中で、女は男より強くならなければならないという信念を持つようになっていた。

「おなごは男より、強くなければいかん。強い男を後ろから支えてやらなければならんからおなごは男より鍛えなければいかん」

この信念はだれに言うわけでもなく、彼の胸の中で長い間育まれていた。

優れたキャリアウーマンの多くが父の影響を受けたというが、桑原永子、現在の川添永子、全日本女子剣道選手権大会三連覇をなしとげた彼女も、この厳しいスパルタ教育を実践する父にしがかれたのである。

熊本はもとと「尚武の国熊本」と言われ、武道を奨励する気風が強い。宮本武蔵の終焉しゆうえんの

地でもあり、剣道が盛んである。

現在剣道人口は全国で六百万とも言う。そのうち女子は五十万と推定される。増加する女子の剣道人口には、数多くの女性剣士が影響を与えてきた。その中であって、桑原永子の出現がそれに拍車をかけたとも言われている。

永子に剣道を習わせることに、起たちは反対を唱えた。

「わたしは反対ですけん。こぎやんに男の子おとこつぽくなってしまうて、なんとかして女の子おんなこらしゅうさせようとおもっとったとに、ああたは分かって下さらんとですか？」

と起は夫に言いたい。しかし無類の亭主関白の夫に反対を押し通すのも難しい。何としてもやめさせたい彼女は、親類や姉妹に相談を持ち掛けた。

すると、それぞれまちまちの意見があった。

「何、桑原さんもそぎゃん長くさせると言わんじやろう、これはこのまま見とったらよか、そのうち熱もさめなはるたい」

「今のうちにやめさせんと、男の子おとこんごつ乱暴な子ができるよ、ああたんとこは男の子おとこがおらんけん、桑原さんも永子ちゃんを男の子おとこのように育ててみたかつよ、早めに止めさせなはらんと」

「とにかくトールさんはやるといいなはったら、どこまでもやる人だけん、アイスキャンデーを六十本も食べて死にそうになった人だけん、危なかよ、永子ちゃんにやらんって言わせたらどうね？」

桑原透の性格を語るエピソードにアイスクャンデー事件がある。中学生の頃アイスクャンデーの食べ競べで六十本も食べ、生死の間をさまよったのである。

「熊本は武道日本一の県だけ、女の剣士が出て、少しもおかしくなか、やらせてみてもよきたい」と言う者までいる。

起は夫の説得が駄目ならと、今度は永子自身に言い聞かせようと考えた。

「永子ちゃん、ああは剣道ば習いたかと？ お父さんに言われて仕方なかけん、剣道ばすつとじゃなかと？」

「……………」

「あのね、これお父さんに内緒よ」

「お父さんに内緒」と言われて、永子はますます戸惑う。

「永子ちゃん、可愛らしとお洋服ば買うてあげるけん、お父さんに『剣道はせん』っていいなきい」

「剣道はせんって？」

永子は、すっかり迷い始めていた。

確かにリボンのついたワンピースを欲しいと思っていた。

——しかしお父さんと約束したけん……。

「永子、にしゃこれから剣道ば習うとぞ、男の子と一緒ばってん、気にせんでやれ……よかな、お父さんが毎日道場についてってやるけん」

「剣道すると、どぎゃんなる？」

「体も心も強うなつて、立派なおなごになる」

永子はお父さん子であり、父の言うことは良く聞く。逆らつたことはない。逆らつて「お仕置」を受けたこともあるし、父が怖い。

だからこのときも、「うん、剣道やる」と約束した。

「にしゃ約束したけん、あとでやらんといつたらいかんぞ」

父の言葉が耳にこだましている。

思案している娘の様子に母は、躊躇^{ちゆうちゆう}をさせないかのように、言った。

「永子ちゃん、女^{おなご}の子が剣道なんかしたつてしよんなか、女の子はもっと優しゅうてかわいらしかもんば、習つたほうがよか」

「お父さんなどぎゃん言いなはつとだろか？」

お父さんは自分が剣道をすることをとても喜んでいた。もししなひと言うとがっかりするに違いない。しかし、目の前のお母さんを悲しませるわけにもいかない。両親を大好きな永子にとつて、どちらの言うことをきいたらいいのか、選択に迷う。

しばらく思案していた永子は言つた。

「うん、じゃ、お父さんに言う、『剣道はせん』つて言うてみる」

翌日、娘達は、食卓につきおとなしく座つていた。桑原透は既に外出から帰つて晩酌を始めている。少しでも横座りしたり、頬杖^{ほづえ}をついたりすると、父親の怒声が落ちてくるから、少なくとも父親が家にいる間だけでも神妙にしている。

永子は、昨日母と取り決めたことを父に言わなければならない。落ち着かない様子である。